

南台人文社會學報 2014 年 05 月

第十一期 頁 227-249

主修日語大學生日語辭典使用現況調查

— 以日語學習時間長短為主 —

鄧美華*

摘要

辭典是了解本國語言及學習外語不可或缺的工具書。無論在日本，還是在中國大陸，在辭典方面的研究都有相當程度的進展，唯有台灣在這方面的研究，目前尚待加強。特別是在日語辭典方面的研究。

2004 年在台灣翻譯學會下設立了「辭典與語料庫中心」，以辭典的研究為主。然而，該中心的研究大多以英語辭典為主，有關日語辭典方面的研究幾乎沒有。在台灣日語學習人口僅次於英語，位居學習人口的第二多。辭典是學習外語的工具，如果能夠正確地使用辭典的話，會為外語學習帶來正面的效應，因此辭典使用現況調查，以及探討辭典的問題所在是有其必要的。

本文屬於基礎研究，將依據學習者的學習時間長短，以「1.擁有日語相關辭典數」「2.擁有辭典的種類」「3.最常使用辭典的種類」「4.購買辭典的主要原因為何」「5.在何種情況下會使用辭典」五個項目，進行問卷調查並分析調查。結果得知，主修日語大學生擁有的日語辭典以紙本日華辭典居首、電子辭典次之，然而經常使用的辭典是電子辭典。而使用的辭典無論是紙本的辭典或電子辭典，都集中在一、二家出版社（或公司）。此外，即使主修日語的學習者也甚少使用日日辭典（日本國語辭典）等。

關鍵詞：日語辭典、日華（漢）辭典、電子辭典、動機、策略

*鄧美華，南臺科技大學應用日語系副教授

電子信箱：mikade@mail.stust.edu.tw

收稿日期：2014 年 03 月 13 日；修改日期：2014 年 05 月 08 日；接受日期：2014 年 05 月 23 日

STUST Journal of Humanities and Social Sciences, May 2014

No. 11 pp.227-249

日本語を専攻している大学生の日本語辞書の使用状況

—学習歴別を中心として—

鄧美華*

要旨

辞書は、母国語の意味が理解できない場合や、外国語を学習する際に重要な存在である。日本においても中国においても、辞書に関する研究に力が注がれているが、台湾では辞書に関する研究にはそれほど関心を持たれていない。特に、日本語の辞書に関する研究はそうである。

2004年に台湾翻訳学会の下に「辞典與語料庫中心」が設立され、辞書の研究が中心に進められるようになったものの、それもほとんどは英語の辞書中心の研究であり、日本語の辞書に関する研究は無いに等しい。台湾では、日本語は英語に次いで、学習人口が多い外国語である。辞書は外国語を学習するときの道具でもあるので、辞書を正しく利用できれば、日本語の学習にプラス効果が持たられると思う。ゆえに、辞書の使用状況や辞書の問題点などを研究する必要がある。

本稿では、一つの基礎研究として、日本語学習歴別によって、1.辞書の所持数 2.所持辞書の種類 3.一番よく利用されている辞書の種類 4.辞書を利用（購入）する動機・目的 5.辞書を利用する時に学習者がとったストラテジー の五つの項目で、日本語を主専攻としている大学生の日本語辞典の使用状況について調査・分析を試みた。その結果、学習者が持っている辞書のなかでは日華辞書が一番多く、

*鄧美華，南臺科技大學應用日語系副教授

電子信箱：mikade@mail.stust.edu.tw

收稿日期：2014年03月13日；修改日期：2014年05月08日；接受日期：2014年05月23日

その次は電子辞書であったが、よく利用されている辞書は電子辞書であることが分かった。日本の国語辞書の利用者は少なかった。なお、学習者に所有されている辞書が、紙の辞書の場合も電子辞書の場合も一部の出版社だけに集中していることが今回の調査で分かった。

**キーワード：日本語辞書、日華（漢）辞書、電子辞書、動機、ストラ
テジー**

一、はじめに

辞書は、母国語の意味が理解できない場合や外国語を学習する際に重要な存在である。ゆえに、辞書が正しく記載されているかどうか、十分な情報を提供しているかどうかは、学習者に大きな影響をもたらす。日本においても中国においても、辞書に関する研究に力が注がれているが、台湾では辞書に関する研究にはほとんど関心を持たれていない。特に、日本語の辞書に関する研究がそうである。

2004年に台湾翻訳学会のもとに「辞典與語料庫中心」が設立され、辞書の研究が中心に進められるようになったものの、それもほとんどは英語の辞書中心の研究であり、日本語の辞書に関する研究は無いに等しい。台湾では、日本語は英語に次いで、学習人口が多い外国語である。辞書は外国語を学習するときの道具でもあるので、辞書を正しく利用できれば、日本語の学習にプラス効果が持たられると思う。ゆえに、辞書の使用状況や辞書の問題点などを研究する必要がある。

本稿では、一つの基礎研究として、日本語学習歴別によって、1.辞書の所有数 2.所有辞書の種類 3.一番よく利用されている辞書の種類 4.辞書を利用（購入）する動機・目的 5.辞書を利用する時に学習者がとったストラテジー の5つの項目で、日本語を主専攻としている大学生の日本語辞書の使用状況について調査・分析を試みたいと考える。

二、先行研究

日本語の辞書について論じたものとしては、林（2002）、王（1984）（2000）、尹（2000）、潘（2007）、張（2009）などの研究がある。林（2002）

は、日中同形類義語の意味記述が不十分ということから日華辞典¹の記述問題について論じている。王（1984）（2000）は、日華辞典は中国人日本語学習者の立場から編集すべきだと主張した。尹（2000）は、中国で出版された日華辞典はすでに中国人日本語学習者の立場を考慮して編集されていると説明し、その特色について述べた。潘（2007）は歴史的な観点から、日本語の辞書の紹介をした。張（2009）は日本語を専攻している大学1～3年の学習者292名を対象として、日本語の辞書の使用状況について調査・分析し、学習歴1年以内の学習者の半分以上は辞書を持っていないこと、辞書を選ぶときの基準については、「便利さ」を最優先に考えた学習者が一番多く、その次は「語彙数が多い」であったことを明らかにした。

前述した先行研究は、林（2002）を除いて、全部中国大陸の研究者のものである。同じ中国語母語話者と言っても、中国大陸と台湾とでは言葉使いが違ふし、経済環境なども違ふので、辞書に対する要求は台湾の場合と必ずしも同じではない。学習者の使用状況に関する研究は張（2009）だけなので、本稿は張（2009）の研究成果を踏まえながら、台湾人日本語学習者の日本語辞書の使用状況について調べることとする。ただし、張（2009）が学年別（大学の一年生から三年生まで）に分けた調査であるのに対し、本稿は学習歴別による調査である点で張（2009）とは大きく異なる。また、張（2009）の調査では、2校、292名の学生を対象としているのに対し、本稿では10校、1,169名の学生を研究対象としており、調査対象数が張（2009）のおよそ4倍であることから、結果の信頼性は本稿の方がより高いと言えよう。

本稿は、日本語を専攻している台湾人大学生の日本語辞書の使用

¹ 日中対訳辞書には、「日華辞書」と「日漢辞書」という名前があるが、本稿では便宜上、「日華辞書」を使用することとする（以下同様）。

状況を調査するものであるが、調査結果が今後の日本語教育や辞書の編集・修訂に役立てば幸いである。

三、調査資料について

3.1 調査期間

2012年2月から2012年6月まで。

3.2 調査対象と方法

本稿では、台湾の4つの総合大学の日本語学科と、6つの科技大学の応用日本語学科の学生計1,273名を対象として、アンケート調査を行った。その中で、答えの判断が難しいものや不完全なものを研究対象から除外した。なお、学習歴が7年以上8年未満、9年以上10未満²は正規の学校教育年数を越えており、且つ、人数も少ないので、代表性が足りないと判断し、今回の調査対象から除外することにした。ゆえに、有効者数は1,169名となり、本稿はこの1,169名を研究対象とする。

台湾では、高校で日本語を主専攻にしている学生であっても、いろいろなルートを通じて、総合大学の日本語学科にも技職系の大学の応用日本語学科にも入学できるので、一律に学年別に分けた調査では不十分なところがある。ゆえに、本稿では、今までの研究とは違い、学年の違いによる調査ではなく、学習歴によってアンケート調査を行った。学習歴と被験者数の内訳はそれぞれ、1年未満³（162名）、1年以上2年未満（125名）、2以上3年未満（255名）、3年以上4年未満

² 今回の調査では、学習歴が8年以上9年未満の学習者はいない。

³ 便宜上、以下では、学習歴1年未満を0～1年、1年以上2年未満を1～2年、2年以上3年未満を2～3年、3年以上4年未満を3～4年、4年以上5年未満を4～5年、5年以上6年未満を5～6年、6年以上7年未満を6～7年で表記する。

(225名)、4年以上5年未満(162名)、5年以上6年未満(115名)、6年以上7年未満(125名)となった。

アンケートは、「辞書の所有数」及び「一番よく利用している辞書」の二項目を除いて、すべての調査項目で幾つかの選択肢を作り、被験者に選んでもらうことにした。また、ネット辞書や辞書アプリは、いずれもインターネットに繋がないと使えないので、ここでは参考までに調査してみたが、辞書の所有数には入れないことにする。本稿で調査した結果とその分析は次で述べる。

四、調査の結果と分析

4.1 調査の結果

以下では、調査結果を表で示しながら論を進める。

4.1.1 日本語辞書の所有数

この項目は、被験者に日本語関係の辞書の所有数について書いてもらったものである。その結果は表1が示すとおりである。

全体から見ると、辞書の所有数は1冊(39.9%)が一番多く、以下2冊(32.4%)、3冊(13.7%)の順となっている。

表 1

学習歴別で見た辞書の所有率（単一回答）

辞書数 学習年数	0冊	1冊	2冊	3冊	4冊	5冊	6冊	7冊	8冊
0~1年	16.7	62.3	19.8	0.6	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0
1~2年	19.2	54.4	21.6	4.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0
2~3年	4.7	40.0	36.1	14.5	2.4	1.1	0.8	0.4	0.0
3~4年	0.9	35.6	38.7	18.7	4.1	1.3	0.4	0.0	0.4
4~5年	4.3	37.0	40.8	13.0	3.7	1.2	0.0	0.0	0.0
5~6年	0.9	20.9	35.7	24.3	12.2	5.2	0.9	0.0	0.0
6~7年	1.6	28.8	34.4	20.8	9.6	3.2	0.8	0.0	0.8
平均	6.9	39.9	32.4	13.7	4.8	1.7	0.4	0.1	0.2

（注：各学習年数において、所有率が一番高いところをゴシック体で示している。）

学習歴別から見ると、学習歴が長ければ長いほど辞書の所有数が増えていく、という傾向が見られる。しかし、辞書の所有数は一番多くても3冊までにとどまり、4冊以上持っている人は少なかった。また、学習歴3年以下（3年未満）の場合、1冊しか持っていない学習者が最も多く、学習歴が3年以上になると、2冊持っている学習者が一番多かった。特に、学習歴が4~5年の学習者では、辞書の所有数が2冊と答えた人の割合が40.8%と最も高かった。辞書所有数が3冊の場合では、所有率が一番高かったのは学習歴5~6年の学習者で、その次は学習歴6~7年の学習者であったのに対して、所有率が一番低かったのは学習歴0~1年の学習者で、その次は1~2年であった。

この結果から、以下のことが推測される。すなわち、日本語学習の最初の1、2年目は基礎教育であり、教師に教えてもらったものをそ

のまま覚えればいいので、辞書の使用率が低く、3年目からは既習した日本語を生かして文章を作ったり、教科書以外のものを読んだりしなければならないので、辞書の使用率が高くなるのではないかと、ということである。

なお、1～2冊の辞書を所有している学習者の、所有辞書の種類をさらに詳しく見てみると、辞書を1冊しか持っていない場合、59.5%の学習者は紙の日華辞書（以下、日華辞書と記す）を、37.6%の学習者は電子辞書⁴を所有していた。辞書を2冊持っている場合では、59.3%の学習者は日華辞書と電子辞書の両方を持っていた。この結果から、学習者は、最初に日華辞書を購入して、2冊目の辞書が必要になると電子辞書を選ぶ、という辞書購入プロセスを経ていることが予想できる。これは、紙の辞書は値段が安いので、辞書が必要な場合、まず最初に紙の辞書が選択されていると考えられる。そして2冊目の辞書が必要になった時に、電子辞書が選択されているのだろう。電子辞書は少し高値ではあるが、携帯しやすいし、日華辞書のほかにも華日辞書や外来語など多数の辞書が搭載されているので、購入の動機が高くなるのではないかと推測できる。学習者がどんな辞書を所有しているのかについては、次の4.1.2で詳しく述べる。

また、上述した辞書所有数の比率のほかに、表1の調査結果でもう一つ注意しておきたいのは、辞書を1冊も持っていない学習者が6.9%もいたことである。辞書所有数がゼロの学習者の中では、学習歴1～2年の場合が最も多く、19.2%を占めており、以下学習歴0～1年（16.7%）、2～3年（4.7%）、4～5年（4.3%）の順であった。学習歴が0～1年の場合、辞書所有冊数がゼロの学習者が半分以上を占めて

⁴ 電子辞書には日華、華日、外来語など、何種類もの辞書が搭載されているが、本稿は電子辞書をまとめて一冊と数えることにした（アンケートには明記してある）。

いるという張（2009）の調査結果とは、ずいぶん開きが見られた。

なお、今回の調査で学習歴 1～2 年の学習者における辞書所有数ゼロの比率は、学習歴 0～1 年の場合より高いことも張（2009）の調査結果と異なっており、その理由を今後詳しく調べる必要がある⁵。

4.1.2 学習者が所有する日本語の辞書の種類

日本語学習者の辞書所有数だけではなく、学習者がどんな場合に、どのような辞書を利用しているのかも調べる必要がある。本項では、日本語学習者がどんな辞書を所有しているのかについて調べた結果を述べる。

表 2 から分かるように、全体から見ると、学習者が持っている辞書のなかでは日華辞書（70.2%）が一番多く、その次は電子辞書（57.7%）であった。最近ではスマートフォンが普及してきたので、辞書アプリを利用している人数も 15% ぐらいに達している。この調査結果は張（2009）の結果と食い違いが見られる。張（2009）の調査では、日漢・漢日辞書⁶の利用者数が一番多く、60% もおり、以下は電子辞書（16%）と日漢（8%）辞書の順となっている。漢日辞書の利用者数の比率は、本稿の調査とはほとんど変わらず 4% である。しかし、日本の国語辞書（以下、日日と記す）、外来語辞書の利用者数は、それぞれ、3%、1% で、本稿の調査結果の 10%（日日）と 7%（外来語）とは開きが見られた。台湾と中国では、日本語学習者の辞書使用状況がずいぶん違うことが本稿の調査で分かった。

⁵ 学習歴 1～2 年の学習者は 2010 年に入学した学生である。他の大学で同じ学年の学生の学習状況を作者が口頭で聞いた結果、2010 年入学の学生の学習意欲は他の学年より低いという傾向が見られた。このような学習意欲の違いも、辞書の使用状況と関係があるのではないと思う。

⁶ 張（2009）の論文が「日漢」辞書という表記を使用しているので、ここでもそれをそのまま使う。

表 2

学習歴別で見た所有辞書の種類 (複数回答)

辞書の種類 学習年数	日華	華日	日	日華	専門	外来語	電子	APP	その他
	日華	日	日	華日					
0~1年	57.4	0.0	1.9	1.9	0.0	0.6	43.2	15.4	9.3
1~2年	45.6	0.0	1.6	0.8	0.0	4.0	52.0	16.0	7.2
2~3年	68.6	4.7	10.6	5.5	0.4	4.3	58.0	0.0	11.4
3~4年	79.1	5.8	14.2	6.7	0.9	5.8	62.7	11.1	5.8
4~5年	67.3	3.1	4.3	6.8	0.0	7.4	53.7	12.3	4.9
5~6年	85.2	6.1	20.9	7.8	0.0	13.9	72.2	15.7	12.2
6~7年	88.0	4.8	18.4	10.4	0.8	19.2	64.8	16.0	8.8
平均	70.2	3.5	10.1	5.6	0.3	7.0	57.7	15.3	8.5

(注:各学習年数で、最も所有率の高い辞書のところの数値をゴシック体で示している。)

また、学習歴別からみると、学習歴1~2年を除いて、基本的にはどの学歴層も、日華辞書の所有率が一番高かった。しかし、学習歴1~2年の学習者の場合、日華辞書ではなく電子辞書の所有率が一番高かった。このことは、4.1.1で述べた点、すなわち、辞書所有数ゼロの割合を各学習歴層で比較した場合、学習歴1~2年の学習者が最も高かったという点とを併せて考えれば、学習歴1~2年の学習者は、他の学習歴層の学習者とは、学習方法、学習態度に何らかの違いがあるのではないか、と思われる。この点は、今後さらに追究していくべきだと思う。

電子辞書はそれなりの利便性があるが、やはり値段が高いため、日華辞書に比べると所有者数が少ないのもうなずける。本稿ではまた、

どの会社の日華辞書や電子辞書を利用しているのかについても調べてみた。その結果、日華辞書では、使用率のトップスリーはA出版社⁷の『新〇〇日漢辞典』(51.9%)、『〇〇明解日華辞典』(26.5%)と『袖珍日漢・漢日(対照語)辞典』(5.4%)であった。しかも、1位の『新〇〇日漢辞典』と2位の『〇〇明解日華辞典』を合わせると、全体の78.4%にあたり、3位の『袖珍日漢・漢日(対照語)辞典』との間にはずいぶん開きが見られた。

一方、電子辞書の使用率を見てみると、M社の電子辞書(49.8%)、K社の電子辞書(46.3%)、H社の電子辞書(3.89%)の順であった。台湾で販売されている電子辞書は限られているという点を考慮する必要はあるものの、紙の辞書と同じく、利用者は特定の二社に集中していた。

以上のように、紙の辞書にせよ電子辞書にせよ、利用者がある特定の辞書に集中しているという結果が得られたわけだが、このことは以下のことを示唆している。すなわち、利用者の多い辞書における「品詞記述」、「用例及びその訳文」、「漢字表記」、「見出し語の訳語」に問題がないかどうかを、しっかり検討しなければならないということである。もし問題があるのにそのまま利用されているとしたら、学習者への悪影響は計り知れない。

この点は、今後の課題としたい。

4.1.3 一番よく利用されている辞書の種類

ここでは、日本語学習者の間で一番よく利用されている辞書についての調査結果を述べる。その結果は表3のとおりである。

学習歴0~1年の学習者を除き、他のどの学習歴の学習者も、電子

⁷ 本稿では、出版社の宣伝にならないようにするために、すべての出版社名をアルファベットで表示する。

辞書を一番よく利用していることが分かった。この結果を表 2 と比べてみると、所有率の高い辞書の種類と使用率の高い辞書の種類は、必ずしも一致していないことが分かった。すなわち、前項の表 2 によれば、全体的に所有率が最も高いのは日華辞書であるが、表 3 によれば、全体的に使用率が最も高いのは電子辞書である。恐らく携帯の利便性が一番大きな原因であろう。

表 3

学習歴別で見た一番よく使われている辞書の種類（単一回答）

辞書の種類 学習年数	日華	華日	日日	日華 華日	専門	外来語	電子	APP	その他
	42.7	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	37.8	11.2	7.7
1~2年	31.0	0.0	0.9	0.9	0.0	0.0	42.2	12.9	12.1
2~3年	30.1	1.5	3.9	0.4	0.0	0.8	45.2	10.8	7.3
3~4年	35.2	0.0	3.8	0.8	0.0	0.4	47.0	6.4	6.4
4~5年	34.0	2.1	4.2	0.0	0.0	0.0	45.8	7.6	6.3
5~6年	23.5	0.8	3.4	0.8	0.0	0.0	55.5	5.0	10.9
6~7年	32.3	0.8	1.5	2.3	0.0	0.0	47.4	7.5	8.3
平均	32.7	0.7	2.5	0.8	0.0	0.2	45.8	8.8	8.4

（注：各学習年数で、最もよく利用されている辞書の数値をゴシック体で示している。）

4.1.4 辞書を利用（購入）する動機・目的

表 4 は辞書を利用（購入）する動機について、「日本語を勉強するため（すなわち、単語の意味を調べるとき）」、「翻訳のとき」、「教師の要求」、「作文を書くため」、「念のために買って置く」、「その他」の六

つの項目に分けて調べた結果をまとめたものである。

全体から見ると、「日本語を勉強するため (78.0%)」に、日本語の辞書を利用する比率が一番高く、その次は「翻訳のとき (71.9%)」であり、この 2 項目で全体の約 65%を占めた。微差ではあるが、「教師の要求」のために辞書を購入する学習者の比率は、「作文を書くため」に購入する学習者の比率より高かった。さらに学習歴層で見ると、学習歴 1~2 年を除いて、どの学習歴層の学習者も、辞書の利用動機は「日本語を勉強するため」と「翻訳のとき」に集中していた。このことから、日本語学習者はインプットはしているが、積極的にアウトプットはしていないという日本語学習方法を取っていることが分かった。

なお、「念のために買っておく」という理由で辞書を購入した学習者の中で、学習歴 1~2 年の比率が一番高かった。この結果を 4.1.1 と 4.1.2 の調査結果（「辞書を持っていない人数の比率が、他のどの学習歴層よりも高かったこと」と「電子辞書の所有率が日華辞書より高かったこと」）と併せて考えれば、学習歴 1~2 年の学習者は積極的に辞書を利用する意欲が少なく、ひいては、他の学習歴層より日本語の学習意欲も低い、ということが推測できるのではないかと思う。

表 4

学習歴別から見た辞書利用（購入）の動機・目的（複数回答）

辞書の 種類 学習年数	日本語を勉強するため	翻訳	作文を書くため	教師の要求	念のために 買っておく	その他
0~1年	69.1	56.2	12.3	17.3	22.8	4.3
1~2年	72.8	60.8	22.4	15.2	75.2	11.2
2~3年	77.6	76.5	34.5	29.0	17.3	2.7
3~4年	88.4	82.2	29.3	29.8	13.8	3.1
4~5年	72.8	64.8	22.2	30.2	14.2	0.6
5~6年	83.5	81.7	32.2	27.8	15.7	0.9
6~7年	81.6	80.8	26.4	34.4	16.0	3.2
平均	78.0	71.9	25.6	26.2	25	3.7

（注：各学習年数で、辞書を（利用）購入する動機・目的の比率が一番高いところをゴシック体で示している。）

4.1.5 辞書を利用する際のストラテジー

本項目では、学習者が辞書を利用する際のストラテジーを、五つの項目に分けて調べた結果について述べる。結果は次の表5のとおりである。

まず、全体から見れば、「知らない単語を見つけたとき」の辞書の利用率が一番高かった。以下、「単語の使い方を知りたいとき」、「日本語で表現したいとき」、「語彙量を増やしたいとき」の順で利用率が減っていった。語彙の量を増やすために辞書を利用する学習者は少なかった。語彙量を増やすためにどのようなストラテジーをとっているのか、興味深いところである。これは今後の調査課題としたい。

表 5

学習歴別から見る辞書を利用するストラテジー（複数回答）

辞書の種類 学習年数	知らない単語を見つけたとき	単語の使い方を 知りたいとき	語彙を増や したいとき	日本語で表現し たいとき	その他
0~1年	90.1	50.0	22.2	49.4	3.1
1~2年	92.0	65.6	34.4	55.2	4.8
2~3年	92.9	69.8	29.0	72.5	1.6
3~4年	96.4	70.7	30.7	65.8	1.8
4~5年	79.0	59.3	34.0	52.5	2.5
5~6年	97.4	72.2	32.2	77.4	0.9
6~7年	97.6	68.0	32.0	71.2	2.4
平均	92.2	68.8	30.6	63.4	2.4

（注：各学習年数で、辞書を利用するとき最もよく取られるストラテジーのところをゴシック体で示している。）

また、学習歴別から見ると、どの学習歴層も「知らない単語を見つけたとき」に辞書を利用する、というストラテジーを取っていた。また、学習歴 2~3 年、5~6 年、6~7 年の学習者の場合は、他の学習歴層が「単語の使い方を知りたいとき」に辞書を使うのとは違い、「日本語で表現したいとき」に辞書を利用する学習者が多かった。学習歴が長いほうが積極的にアウトプットしているという学習態度が推測できる。

4.2 結果分析

日本語辞書は日本語を学習するとき不可欠な存在である。ゆえに、辞書の使用状況や、辞書が正しく編集されているかどうかは、日

本語学習に大きな影響を及ぼす。

また、所有辞書数、辞書の購入動機、辞書を利用するときに行ったストラテジーなどからは、学習者の日本語学習に対する意欲なども推測できる。以下では 4.1 の調査結果をまとめながら、本稿の分析と考察を進めていくこととする。

(1) 辞書の使用状況

今回の調査から、日本語学習者の日本語辞書の使用状況は次のようにまとめられる。

- ① 所有辞書の種類や、よく利用されている辞書の種類の調査においては、順番は違うが、日華辞書と電子辞書がトップツリーになっている。日本語の国語辞典（日日辞書）は、所有率も使用率も低かった。趙・胡（2005）は、英語の微妙なニュアンスを正確に理解するには英英辞典を利用するのが一番いいと述べている。これは、日本語を学習する場合にも当てはまるのではないだろうか。日華辞書と電子辞書の使用率（78.5%）が日日辞書（2.5%）よりずっと高かったことや、「日本語を勉強する」、「翻訳」のために辞書を利用しているという調査結果から見ると、日中両言語の微妙なニュアンスの違いやその他の違いにまで踏み込んで理解しようという学習者は少なく、ほとんどの学習者は単に日本語を中国語で理解できさえすればよいという学習のストラテジーを取っているのではないかと考えられる。しかし、「交通が混乱している（中国語訳：「交通混亂」）」「交通が混雑している（中国語訳：「交通混亂、交通混雑」）」の「混乱」「混雑」のような類義語を日本語で正しく表現できるようになるには、やはり日日辞書を利用したほうがよいだろう。その方がニュアンスの違いを正確に理解できるようになるし、ひいては日本語で上手に表現でき

るようになるのではないかと思う。ゆえに、今後は、学習者に日日辞書の良さを広め、日日辞書の使用率をあげていく必要があるだろう。これもこれからの課題としたい。

- ② 学習歴 0～1 年の学習者を除いて、よく利用されている辞書は電子辞書（45.8%）であった。電子辞書は普通、見出し語の意味しか表示されず、例文や文法などの特徴はさらに画面を切り替えないと表示されないの、単語を系統的ではなくバラバラに覚えてしまうおそれがあるが、携帯の利便性、検索スピードの速さなどのメリットがあり、スピードが求められている今の世の中では、これから更に加速度に普及するだろう。

これに対して、紙の辞書は一つの単語の情報を一目で見ることができる点が優れている。電子辞書にせよ、紙の辞書にせよ、うまく使いこなせればそれでいいのである。

- ③ 紙の辞書の場合も電子辞書の場合も、学習者が購入した辞書は、一部の出版社のものに集中していた。このことは、辞書の質の問題（語彙項目の選択、例文など）にも目を向けるべきであることを示唆している。質の悪い辞書は、学習者に悪影響をもたらすからだ。しかし、台湾では辞書に関する研究はほとんど関心が払われていない。2012 年 10 月 1 日付けのテレビニュースでは『「哭爸哭母」⁸也算台湾俚語？罵人話納入國小教材惹議（「哭爸哭母」も台湾俗語？罵る言葉を小学校の郷土教材に取り入れたことで巻き起こった論争。（作者訳）』というタイトルのニュースがあった。「哭爸哭母」は確かに台湾語の俗語としてよく使われているのだが、言葉の使用にお

⁸ 「哭爸哭母」は台湾語の俗語で、まるで両親が亡くなったように泣いたり騒いだりしている様子を表す。転じて、「大声で騒いだり、口先ばかりで行動しない人の例え」という意味になった。

いてまだ十分な判断力を持たない小学生用の教材にこれを取り入れたり、台湾語字典に取り入れるのが、適当かどうか、という点が問題になった。もちろん、保護者や研究者の間には賛否両論あるが、これも、台湾の辞書に関する研究への関心の低さが引き起こした問題の一つであるといえるのではないだろうか。

中国大陸では、北京、広東、上海、廈門などに辞書研究センターが設置されており、大学や大学院でも辞書学に関する授業⁹が開講され、辞書の編集、辞書の問題点、辞書のこれからの発展、正しい辞書の使い方などの研究がおこなわれている。しかし台湾では、辞書の研究にはほとんど関心が持たれていない。学習者はもちろん、もしかすると教師の中にも、辞書の正しい使い方が分からない人がいるのではないかと思う。本稿が、台湾においても辞書研究（特に日本語の辞書）に目が向けられるようになるきっかけとなれば幸いである。

- ④ 「日本語を勉強するため」、「翻訳」のために辞書を購入した学習者（65.3%）は、「作文を書くため」という理由で辞書を購入した学習者（11.0%）より遥かに多かった。このことは、学習者がインプットはしているものの、積極的にアウトプットする傾向がまだ見られないからである。言葉の学習はコミュニケーションのために存在しているので、既習したものを積極的にアウトプットすることは重要である。これをどのように指導していくのかは、指導の立場にいる教師たちにとってこれからますます重要な仕事になっていくのではないかと思われる。なお、どのように辞書を利用して言葉（そ

⁹ 広東外語外貿大学を例にあげると、「詞典学概論」「詞典編纂実践」「翻訳與双語詞典」などの授業が開講されている。

れが既習の単語であれ未習の単語であれ) をアウトプットすればよいのかということも、教師が指導すべきなのではないかと思う。

(2) 台湾における日華辞書の問題点

4.1.2の調査結果から、所有辞書のなかでは日華辞書が一番多く、しかも A 出版社の『新〇〇日漢辞典 第三版』が半分以上の 51.9% を占めていることが分かった。『新〇〇』の「範例(凡例)」のところに、次のような記述が見られる。「在这次修訂過程中……(中略)……先後歷經数十次的反覆修訂校對, 耗時五年之久, 得以完成(今回の修訂……(中略)……前後数十回修正・校正を繰り返して、五年間かかってようやく完成することができた。(本稿作者訳)」。すなわち、辞書の改訂は、かなりの時間をかけ丹念に校正を繰り返して、ようやく完成するものである。にもかかわらず、改訂後の凡例のところに次のような間違いが見られる。

二、漢字標記の 2.の例②の所

例：②：ゆり ㊶ 【百[▽]合[▽]】〔名〕

「ゆり」のアクセントは㊵なのに、㊶と表記されている。

三、詞義解釈

(中略)

3 名詞變化出的動詞 (名詞由来の動詞)

例：ふんぎり ㊵ 【踏(ん)切(り)】・・(ふんずる ㊶ [自五])

4 例：①：しずか ㊵ 【静(か)・閑(か)】〔名〕・・・(～さ ㊶ [名])

③：きのどく ㊵ ㊶ 【氣の毒】〔副・形容ダ〕

「ふんぎり」は「ふんぎる」という動詞由来の名詞であることを説明しなければならないのに、「ふんずる」という間違った表記がなされている。また、「しずか」のアクセントは②なのに、①と表記され、「きのどく」は名詞及び形容動詞であるのに、副詞と書かれている。

「凡例」は辞書のはじめに掲げられるものであり、辞書の編集方針や利用の仕方などに関する記述であるから、正しく示さないと利用者を混乱させるおそれがある。凡例のところですでにこのようなミスが出ていては、辞書の内容の正確さも疑われるだろう。利用者が多いからこそ、辞書の編集や内容の正確さも追求されるべきではないか。

本稿は日本語学習者の辞書利用状況の研究に止まり、台湾における日華辞書の問題点については検討できなかった。辞書の問題点について複数の視点から詳しく検討していくことは、今後の課題としたい。

五、おわりに

本稿は日本語を専攻している大学生を対象に、日本語辞書の使用状況を調査した結果をまとめたものである。その結果は以下の通りである。

1. 所有辞書数は、1冊か2冊が全体の71.3%を占めている。
2. 所有辞書の種類では、日華辞書の所有率が一番多く、全体の70%を占めているが、よく利用されている辞書は電子辞書(45.8%)であった。このように、所有する辞書の種類と利用する辞書の種類の間には相違が見られた。このことから、学習者は辞書に便利さを求めている傾向が分かった。
3. 紙の辞書の場合も電子辞書の場合も、学習者が購入した辞書は一

部の 出版社のものに集中している。

学習者は単語の意味、単語の使い方、日本語の表現を知りたいときに辞書を利用しているので、このように特定の辞書に利用者が集中しているという今回の結果は、その辞書における「品詞記述」、「用例及びその訳文」、「漢字表記」、「見出し語の訳語」などに問題がないことを明らかにすることの必要性と重要性を、改めて示唆しているといえよう。前述の辞書の幾つかの問題点は、今後の課題としたい。

[付記]

本稿は行政院国家科学委員会研究補助金による研究成果の一部としてまとめたものである。研究案の番号は NSC 100-2411-H-218-010 である。ここに記して感謝申し上げる。

なお、アンケート調査にご協力いただいた義守、呉鳳、台中科大、高雄餐旅大、高雄第一科大、淡江、東呉、南栄、南台、銘伝の先生方及び学生の皆さんにも感謝の意を表したい。

参考文献

- 尹学義 (2000)。20 世紀的中国日语類双语辞书。辞书研究。(2000-5 期)
- 王永全 (1984)。評《汉日词典》。辞书研究。(1984-1 期)
- 王永全 (2000)。談漢日词典例句的功能、来源及其他。辞书研究。(2000-3 期)
- 趙玉民、胡彦霞 (2005)。学生使用英语词典现状的调查与研究。吉林商业高等专科学校学报。(2005-2 期)
- 张 勇 (2009)。日語词典使用狀況调查与分析。辞书研究。(2009-5 期)
- 潘 鈞 (2008)。日本辞书研究。上海人民出版社
- 林玉惠 (2002)。日華・日漢辞典から見た日中同形語記述の問題点—同形類義語を中心に—。世界の日本語教育 12。国際交流基金・日本語国際センター
- 華視新聞生活中心綜合報道 (2012.10.01)。「哭爸哭母」也算台灣俚語？
罵人話納入國小教材惹議」

